第七章　鎌倉―大姫

郷子が、割り当てられた部屋に戻ると、志乃が待っていた。
「大姫が住まわれている部屋が判りましたか？」
「知り合いの侍女に聞きましたところ、頼朝さまと政子さまが使われている寝殿の北側の対屋で長らく病床に伏しておられるとのことでございます。義高さまがいなくなってからずっとそのような御様子とか。それから、義高さまがいなくなったことで、大姫が発熱して病臥したことで、政子さまが烈火のごとく怒って頼朝さまの仕業を詰(なじ)ったために、なんでも、義高さまを実際に手を掛けて殺した藤内という武士を命令違反ということで誅殺してしまったということでございます」
郷子は、入間川の畔で藤内と名乗った年嵩の武士が、
「御所さまのご命令で木曽義仲の嫡男志水冠者義高の首を頂にまいった」
と叫んだのを思い出した。
「ええ！　頼朝さまは、ご自分で義高さまの惨殺を命じながら、命令通り殺したその武士を命令違反で殺してしまったのですか」
「そのようでございます」
郷子は、夫にこれほどまでに卑劣な手段を取らせた政子さまの影響力の強さに驚くと同時に、妻に迎合するためとはいえ、手段を選ばぬ頼朝の陰険な性格について戦慄せざるを得なかった。
「私も、伯父上から、義高さまの惨殺に怒った親族の反乱を鎮圧するために頼朝さまの御命令で父上が木曽に遠征していると聞きました」
「義高さまのことについては、頼朝さまも政子さまも随分神経質になられているようですね」
「私が、義高さまの恋文を大姫さまに渡したことが露見したら、私ばかりか父上も咎を受けるかもしれません」
「どうなされますか。もう既に死んでしまった方の恋文を渡したからといって、いまさら致し方ないようにも思われますが」
「いいえ、私は、義高さまからお渡しするように頼まれたのです。そして私は必ずお渡ししますと心に誓ったのです」
「判りました。私も精一杯御協力いたします」
「明日、頼朝さまと政子さまが頼家さまを愛でるために、巳の刻（午前十時）にこの比企谷殿に来られます。そして、私は、未の刻（午後二時）に大蔵御所でお二人に御挨拶することになっています。ですから、巳の刻に大蔵御所に行って、北の対屋に病臥されている大姫さまに密かに面会して、この文をお渡ししたいと思います」
「巳の刻にこの比企谷殿を不在にする理由をいかがいたしましょうか」
「鶴岡八幡宮で御所さまご一家の御多幸と御健康を祈念いたしますと共に私達の都までの

旅の安全を祈願するためということにいたしましょう」
翌朝、郷子は、比企尼と河越御前に鶴岡八幡宮にお参りをする許可を得た後、志乃から侍女の着る袿を借りて着ると、その袖に義高の文があることを確かめた。また、昼食用として芋あんこ入りの饅頭を紙に包んで志乃に持たせた。
郷子と志乃は、頼朝と政子の来る巳の刻がくる前に比企谷殿を出て、二の鳥居の方角に向かって歩いたが、それと入れ違いに、立派な八葉車が屋敷に進んでくるのが見えた。大路の両脇では、多くの人がその八葉車を見守っていて、車に手を振っている子供もいる。ここ、鎌倉では、御所さまと御台所さまの動向は全ての住民の関心事で、その一挙手一投足が注目されている。だから、武蔵国府で示された義経に対する異常な好奇心もここでは感じられない。
大路の南側に見渡す限り広々とした紺碧の海に白波の立つのが見え、遥か遠くの水平線との境目から真っ青な空が天上に広がっている。沖には何艘か漁船が出ていて、その周りには白い海鳥が群がっている。郷子は、海を見るのが初めてだった。いつも山によって遮られてきた景色しか見たとこがない彼女は、何一つ遮る物が無い広大無辺な海の景観に心の中の澱が全て溶け出ていくような爽快感を覚えた。
南側の海以外は、生き生きと芽吹いた緑の青葉に覆われた山塊に囲まれ、北側の高台には、朱色に彩られた華麗な八幡宮の本宮が見える。
郷子は、いままでこれほど美しい風景は見たことがなかった。そして、ここ鎌倉を根拠地として御所を建設した源氏嫡流の目の確かさに感嘆せざるを得なかった。郷子は、比企谷殿よりすこし高台に建つ範頼の居館に住まう従姉妹の紗江がうらやましかった。あの屋敷からは、海が一望できるに違いない。
郷子と志乃は、二の鳥居から八幡宮に一直線に結ばれた段葛（だんかずら）と呼ばれる参道を通って、三の鳥居をくぐり、池の真ん中に架けられた太鼓橋を渡った。そこから建築中の舞殿の脇を通り本宮を見上げながら大銀杏の横の急な大石段を登っていく。
郷子は、本宮の前で合掌して拝礼すると、（大姫さまに義高さまの恋文を無事に届けることが出来ますように。また、大姫さまがこれを読んで元気を回復されますように）と祈った。
郷子と志乃は、一旦三の鳥居まで戻ると、東側に位置する大蔵御所に向かった。
大蔵御所は、広い敷地にいまだ侍所、公文所、問注所等の増改築を行っている様で、木挽きや釘打ちの音が白い築地塀越しに漏れてくる。
二人が、築地塀に沿って歩いて行くと黒塗りの門が見えた。二人は、すこし離れた場所からその門の往来を観察した。下僕や下婢や商人らしき人物が入れ替わり立ち代り出入りしているし、荷物や建築資材を積んだ牛車の出入りも多い。
郷子と志乃は、顔を見合わせてうなずくとさりげなくその門から中に入っていった。
「その二人何処へ行く」
門の横の仮小屋から門衛らしき眇めの侍が出てくると横柄な口調で呼び止めた。
「これをお届けに参りました」

志乃がとっさの機転をきかせて、紙に包まれた芋あんこいり饅頭を見せる。
「だから何処へと聞いておる」
「大庭さまのところへ」
郷子が、この御所の普請奉行と聞いたことがある大庭景義の名前を出した。
眇めの侍は、すこしたじろいだ様子だったが、
「それなら、向こうの門から入れ」と言って、右手を海側に向けてぞんざいに振った。
郷子と志乃が、築地塀に沿って角を曲がると、海側から大路が真っ直ぐ伸びて大蔵御所の黒塗りの立派な正門に繋がっているのが見えた。こちらは、武士や侍女や網代車などが出入りしている。さっきの門は、裏口に違いない。
正門の門衛は、初老のにこやかな感じの侍だった。出入りする武士や侍女の一人ひとりに笑顔で話しかけている。
二人は、気持ちが楽になって、並んで門を入っていった。
「そちらのお二人さんは、始めてみる顔じゃな」
「はい、大庭さまに芋あんこ入り饅頭をお持ちしました」
志乃が、紙に包んだ饅頭を見せた。
「大庭さまに？」
門衛が、不思議そうに言うと首をひねった。
「大庭さまは、たしか今日はいらしていないぞ」
「いえ、その家人の方に」
「家人とは？　どなたかな」
志乃は、突然饅頭入りの紙包みを放り出すと、御所の中に駆け込んだ。
初老の門衛は、しばしあっけに取られていたが、あわてて志乃の後を追いかけて走り出した。
郷子が、周りを見回すと、近くの人は志乃とそれを追いかける初老の門衛の滑稽とも見える駆け比べに気を取られて、郷子に注意を払う者は誰一人いない。
郷子は、志乃が逃げたのと反対方向に、いまにも駆け出したくなる気持ちを必死に抑えて、ゆっくりと歩を進めて行った。
右手には、澄んだ水を蓄えた池とその上に建つ釣殿がありその向こうに大きな建造物が見える。
あれが、頼朝御夫妻が居住している寝殿に違いない。大姫さまが病臥している北の対屋はその裏手にあるはずだ。郷子は、釣殿の陰に隠れて、志乃がどうなったか正門の方を伺ってみるが、普通に人が出入りしている様子だった。
郷子は思う。
（この広大な御所では、数百人の人がそれぞれ種種雑多な仕事をしていて、その全員がお互いに顔見知りであるはずが無い。だから、特に不審な行動を取らない限り、疑われることはあり得ない）

郷子は、寝殿と渡り廊下で繋がっている西の対屋前の透廊の前で草履をそろえて脱ぐと、透廊に上がった。そこから、裏門が見え、あの眇めの門衛がこちらをじっと見つめているのに気がついたが、郷子は、素知らぬ顔をして、西の対屋の廊下を歩いて行った。近くに侍所があるのか、幾人かの侍とすれ違うが、すこしうつむいて歩く郷子に声をかけるものはいない。西の対屋から渡り廊下を通って寝殿に向かうが、さすがにここでは若い侍が声をかけてきた。
「お見かけしない顔ですが」
「新参者でございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます」
「いや、こちらこそよろしく」
寝殿に入って行く郷子の後姿をじっと見送っている彼の視線を背中に感じる。しかし、寝殿を経由してそこから渡り廊下を通らなくては、大姫さまの病臥する北の対屋へ行くことができない。郷子が、さりげなく後ろを振り返って見ると、若侍は背中を向けて侍所へ入って行くところだった。
北の対屋へ通じる渡り廊下に一歩踏み出すと緊張のあまり顔から血が引いて、足が強張るのを感じた。
（私は、必ずやり遂げる）
袿の上から義高の恋文を手でしっかり押さえると、武芸の試合のように丹田に力を込めた。渡り廊下を通って、北の対屋に入ると、二人の若い女性が話しながら角を曲がってくる影が見えた。郷子は、手じかの障子を開けると素早く部屋に入って障子を閉めたが、部屋の中に何かの気配を感じて、悲鳴をあげそうになった。部屋を見渡すと隅に置かれた屏風の裾から、真っ白なネコが緑色の目でじっと郷子を見つめているのに気がついた。ネコがニャーと鳴いた。郷子は、人にするように人差し指を唇に当てると、素早く屏風の後に隠れた。二人は、話を止めて部屋の前で立ち止まった。
「あら、何処に行ったのかと思っていたら、シロはここにいたみたいね」
一人が、障子を開けた。すると、シロも部屋から出たようだ。
「かわいそうに、間違って閉じ込められたのね」
二人は、障子を閉めると、寝殿の方に歩いていったようだ。
郷子は考えた。
（食器の触れ合う様な音がしていたから、あの二人は食器の載った食膳を下げていた侍女に違いない。この北の対屋だけでもいくつも部屋がありそうだが、二人は大姫さまが病臥されている部屋から出てきたのではないか。とにかく、二人の侍女が来た方に行ってみるしかない）
郷子は、二人の侍女が現われた角を曲がると、北の対屋の長い廊下を音をさせないようにすり足で歩いた。どんな小さな音も聞き逃さないよう全神経を耳に集中した。遠くから木挽きや釘打ちの音は聞こえてくるが、ここでは不思議な静寂が支配している。
突然、絹ずれの音がして、数歩前の障子がすっと開かれると中から、袿に唐衣を羽織った

年配の女性が出てきて、郷子と顔を合わせると驚いて言った。
「ここで何をしているのです。あなたが来る様なところではありませんよ」
年配の女性は、恐い顔で郷子を睨みつけた。
郷子は、何も言えずにその年配の女性を見つめた。
「早く出ていきなさい。そうでないと人を呼びますよ」
郷子は、直ぐに引き返すことも可能だった。だが、この機会を逃すともう義高の恋文を大姫に渡す機会は二度と訪れないことも確かだった。郷子は、自分が捕まって、比企尼や母に叱責される姿を想像した。もしかすると、頼朝さまが怒って、義経さまとの婚約を取り消すかもしれないし、父に咎が及ぶかもしれない。
郷子は、腹を決めた。（ここは、正直に話すしかない）
「私は、入間川の畔に建つ河越館に住むものでございます。そこで、義高さまから、ある物を大姫さまへお渡しすることをお願いされたものですから・・」
「入間川とな？」
「さようでございます」
「ある物とは？」
「文でございます」
「義高さまから大姫さま宛ての？」
「はい」
「私からお渡ししましょう」
郷子は、黙っていた。
「私は、大姫の乳母です」
郷子は、乳母と名乗った年配の女性の目を静かに見つめた。
乳母も郷子の目をじっと見ていたが、突然気を変えた。
「判りました。では、こちらにどうぞ」
乳母は、自分が出てきた障子を開けると、郷子に入るように促した。
郷子が、部屋に入ると、屏風があり、その後に褥が敷いてあったが、誰も寝ていなかった。
屏風の裏に回ると、そこには童女といってもいいほどの幼い姫が白い絹の寝間着のまま脇息にぼんやりと凭れ掛っていた。
顔は白蝋のように白く目は虚ろでまるで生気が感じられなかった。
「こちらの方が大姫さまにお渡ししたい物があるとか申しております」
大姫は、興味がなさそうにぼんやりと郷子に顔を向けた。
「実は、義高さまからこれをお預かりしてまいりました」
郷子は、そう言うと懐からすこし皺になった書状を取り出した。
大姫の頬に突然赤みがさし、脇息から体を起こすと、目を一杯に見開いて書状を凝視した。
郷子から、奪うようにして書状を取ると、開ける間ももどかしく中身を読んだ。

姫さま
　御台さまのごてはいですぐに出立しなければなりません。
　おわかれは申しません。
　かならず生きのびておむかえに参りますから。
義

大姫の目から涙が溢れ出て、頬を伝わり口の脇から流れるように落ちていく。
「これを何処で？」
「入間川でございます」
「死ぬ前に？」
「そうでございます」
「その時なんと？」
「『愛しています。何時でもあなたのお側にいてお守りしていますから、強く生きてください』と姫さまに伝えてほしいと」
郷子は、あの時の義高の気持ちを推測して代弁した。
大姫は、脇息に顔を埋めるとわっと童女のように泣き出した。
乳母が郷子に目で合図すると、立ち上がって、障子を開けて外に出た。
郷子も、それに続いた。
「私が、正門まで見送りしましょう。万一咎められてはお困りになるでしょうから」

郷子が、比企谷殿に帰ると、志乃が待っていた。
「首尾よくお渡しできましたか？」
「あなたのおかげで義高さまとのお約束を果たすことが出来ました」
志乃は、正門での一件を思い出したのか可笑しそうに笑い出した。
「私が、池の周りを逃げると、追いかけてきたあの初老の門衛さんが途中で息切れして倒れてしまったんですよ。私が助け起こして医務所まで連れて行くと私の手を握り締めて『何時でも来なさい』言ってくれました」
母の河越御前が頼家の手を引いて部屋に入ってきた。
「もう、御所へ行く支度を始めなさい。湯浴みをして重袿に着替えて化粧も忘れないように。私は、頼家さまのお世話をしなければいけませんから同行できません。その代わり比企尼が同席します。盛長殿もご一緒されるとか。御台所さまには、お気にいられるのですよ」
部屋を出て行きかけて、気がついたように振り返った。
「さっき、小太郎が京から着到しましたよ。ですから、明日か明後日には、鎌倉を出立することができるでしょう」

母が頼家の手を引いて居なくなると、郷子は、武蔵国府の宿屋の前で小母さんが話した言葉を思い出した。
（亀の前のことがあってから政子さまは美人が大嫌いなのよ。それで判ったでしょ。頼朝さまが不細工な娘を義経さまの正室に選ぶわけが）
郷子は、重袿ではなく地味な二衣の袿を着て、化粧はしないことに決めた。
郷子と志乃は、未の刻の御挨拶に間に合うように早めに網代車で出発した。
網代車が、正門に着くと、あの初老の門衛が手を上げて車を止めた。
そして、簾を上げて中を覗きこむと、志乃を見つけて言った。
「今度はうまく化けたな。わしが恋しくてもう会いに来たのかな」
「御所さまご夫妻にご挨拶するために伺候いたしました」
「それは聞いている。義経さまの正室になる方が見えられるとか。確か、河越太郎重頼殿の娘で・・・・」
「郷子と申します」
郷子が答えると、初老の門衛は化粧気の無い顔に地味な二衣の袿を着た郷子をしげしげと見つめて言った。
「お戯れを、年寄りをからかうものではありませんぞ」
そして、志乃に笑顔を見せると軽く会釈した。志乃が気に入ったに違いない。
網代車を降りると、何処からともなく侍女が現われて、志乃を寝殿の控えの間に預けた後、複雑な経路をたどって奥に進むと郷子をある一室に案内した。
家具調度から見ても、格式の高い部屋で、上座は一段と高く設えてある。
その上座の下の右手には祖母の比企尼が左手には伯父の盛長がもう控えている。
郷子は、二人の間のさらに下がった位置に正座した。
「貴女、どうしたのです、その衣装は。これから嫁入りする姫の様には全く見えませんよ」
比企尼が、呆れたように言う。
「それに化粧もしていない。まるで農家の娘っ子のようではないか」
盛長も同調する。
「遅れそうになったものですから」
郷子が弁解していると、上座の後の障子が開いて頼朝と政子が部屋に入ってきた。頼朝が正面に政子がすこし控えてその右手に座る。
頼朝は、色白で面長、髪には一点の乱れもなく、黒い眉が一文字に引かれ、口元に髭をはやした唇は薄く女のように赤い。着ている狩衣にも皺一つなく、正座する姿は品格に満ちている。政子は、漆黒の髪を腰までたらし、落ち着いた顔にうっすらと白粉をぬり、口には紅をつけている。衣装は唐草の単衣に山吹と葡萄の袿を重ね、それに桜の打衣を合わせている。まさに美男美女の似合いの夫婦といえるだろう。
郷子は、床に三つ指をつくと謹んで平伏した。緊張のあまり腹が痛くなった。
（頼朝さまは、私の想像していたような方とすこし違う）

比企尼が、紹介する。
「河越太郎重頼の娘、郷子でございます。この度は、義経さまとのご婚約を決めていただき大慶至極に存じまする」
「顔を上げよ」
郷子が、顔を上げると、頼朝はしばし見ていたが盛長に声をかけた。
「兄の小太郎重房に似ておるな。小太郎は、美青年で評判じゃ」
「御意」
「鎌倉は初めてか？」
「はい」
「鎌倉の印象は？」
「あまりの美しさに感動いたしました」
「ほう、何処が」
「海でございます。海は始めて見ましたので」
「海がな。わしも同感じゃ。ところで、昨日比企谷殿を訪問した時には、外出中とのことであった」
「はい、本来こちらから御訪問してご挨拶をするが筋のところ、御所さま御夫妻が頼家さまを訪問された際にご挨拶するのは、失礼に当たると考えましたので、鶴岡八幡宮を参拝してまいりました」
「ほう、まず八幡宮を参拝したとな。それは良いことをした。八幡宮は源氏の守り神ぞ。わしがこの鎌倉に入って、まずしたことは、由比が浜の辺にあった元八幡を今の場所に移して造営し、ここを中心として鎌倉に要塞を設営することだった。元八幡は、その昔、先祖の源頼義公が京の都にある石清水八幡宮を出陣の際に源氏の氏神として祈祷していたが、それを由比ガ浜辺にお祀りしたものだ。」
頼朝は、突然饒舌になった。
「二の鳥居から三の鳥居までの段葛は、御台所の安産を祈願して整備したものだ。おかげで、頼家という立派な跡継ぎを得ることが出来た。それから、池に架かった太鼓橋を渡ったであろう」
「はい、渡りました」
「あの池はな、源平池といってな、太鼓橋の東側を源氏池といい、西側を平家池というのじゃ。源氏池には、白蓮を植えて三つの島を造り、平家池には、紅蓮を植えて四つの島を造るのよ。その意味が判るか。三は産に通じ、四は死に通じる。すなわち源氏の繁栄と平家の滅亡を意味しているのよ。これは、御台所が考えたのじゃ。また、源氏池の島にある旗上弁天社は、御台所が平家の滅亡を祈願して建てたものだ」
頼朝は、機嫌良さそうに政子のほうを振り返って微笑むと、政子も笑顔で応える。
（頼朝さまと政子さまは、仲が悪いという噂もあるが、むしろ仲が良さそうに見える）
郷子は、意外な感じを受けた。

「ところで、おぬしは八幡宮で何を祈願したのかな？」
「御所さま御一家の御多幸と御健康を祈念いたしました」
「真か？」
「真でございます」
「その他には？」
「都までの旅の安全を祈願いたしました」
「九郎との婚約については？」
「忘れました」
「ははははは」
頼朝は、可笑しそうに笑った。
「まあ、九郎にはまだ会ったことがないからいたしかたあるまいよ。しかし、九郎は女好きだから、女子との色事で苦労させられるかもしれぬな」
「まあ、ご自分のことは棚に上げて良くもそのようなことを」
政子が、口を挟む。
「わしは、九郎のように女とみれば誰かれなしに相手はしないぞ」
「ようおっしゃいますこと。最近は、随分いのしし狩りに御熱心ですわね」
「いのしし狩に行って何が悪い」
「いのしし狩をするのに、なぜ沢山の遊女を同行なさるのですか？」
「いのしし狩りは、家人郎党の慰問のために行っている。わしは、遊女など相手にしない」
「遊女の代わりに、囲い者の家にお泊りになるとか」
「亀女のことか」
「他にも誰かいるのですか」
「お前が、亀女の家を取り壊したから、鎌倉中の笑いものになったのが判らないのか」
「誰が悪いのですか」
「もういい。他人の前で話すことではないわ」
「他人ですって。何処に他人が居るのですか。比企尼や盛長殿はいうに及ばず郷姫は弟の嫁ですよ」
「だからもういいと言っておる」
二人の間が、険悪になってきた。
郷子は、息を呑んで二人のやり取りを聞いていたが、比企尼も盛長もまたかという感じですこしも驚かず泰然自若としている。
その時、後ろの障子が開くと明るい色の衣装を着た大姫が入ってきた。郷子は、さっと頭を下げて大姫から顔を隠した。急に動悸が激しくなった。
「あら、珍しいわね。今日は気分が良いの？」
政子が慈愛に満ちた目で大姫を見る。
「大分、顔色が良さそうだ」

頼朝が口を添える。
大姫は、政子の隣に正座すると、郷子を真っ直ぐに見た。
（義高の恋文は、義高を忘れかけていた大姫をかえって傷つけたのだろうか。
もし、大姫が、義高の恋文のことを二人に話したら、二人は激怒するのではないだろうか）
郷子は、観念して目を瞑った。
「こちらのお方はどなた様でございましょうか」
大姫が、政子に訊く。
「このお方は、この度義経さまの正室になられる人ですよ」
「それでは、私の叔母さまになられるのでございますね」
「その通りです」
「では、ご挨拶を申し上げたいのですが、よろしいでしょうか」
政子が、大姫に頷くと、大姫は上座から降りてきて、郷子の正面に座ると驚いたことに、両手で郷子の左手を包んだ。
「叔母さま、大姫でございます。この度の義経さまとのご婚約おめでとうございます。心よりお祝い申し上げますとともに御多幸を祈念しております」
大姫が、両手を離すと、郷子の手の中に小さな紙片が残された。郷子は、その紙片を握り締めると素早く懐に隠した。
大姫は、立ち上がると一礼して、入ってきたと同じように静かに退出した。
「大姫は、すっかり郷姫が気に入ったようね」
政子が、郷子に向かって笑顔を見せた。

第七章　　了